

宮古島の旅 2020

旅のチカラ研究所

2020年11月

旅のチカラ研究所 植木圭二

沖縄の宮古島は初めて訪れた島だが、沖縄本島や八重山諸島とは違う何とも言えない南の島の魅力を感じた。今回も妻とバックツアーで行ってきた。

■怒り浸透の添乗員

宮古島は沖縄本島の南西約300kmに位置して、その約130km先には石垣島や西表島の八重山諸島がある。

11月中旬のある日の夕方、私たち夫婦はまだ暖かい宮古空港に降り立った。預けた荷物を受け取り、空港ロビーを出ると旅行会社やレンタカー会社の出迎えが勢ぞろいしている。しかし私たちを待っているはずの旅行会社が手配したタクシーの出迎えがない。

今回の旅行も旅行会社のバックツアーを利用した。旅行前に挨拶を兼ねて女性添乗員からもらった電話では、「今回の旅行は全国からお客様が宮古島のホテルに集まるようになっており、羽田からは植木様を含めて、2組4名のお客様が来ることになって

おります。私はホテルで待機していますので、宮古空港でジャンボタクシーの運転手が4名様をピックアップしてホテルまでご案内いたします」と言っていた。

そのジャンボタクシーが見当たらず、誰も現れないまま時間だけが経過して空港にいた人々は三々五々に消えていき人影もまばらになってきた。

私はホテルで待っている添乗員に電話を入れてこの状況を説明すると、電話の向こうではまずは驚きの声、そして申し訳なさそうに「調べますから折り返し掛け直します、少々時間を下さい」



<宮古島と周辺海域の地形>

と言って電話を切った。少しして電話が掛かってきて「タクシーの運転手も、もう一組のお客様にも連絡が取れません」と言っており、かなり慌てている様子が伝わってきた。

小さな空港なので出口は一つしかない。間違はずもなく、今度はもう一組のお客がその辺にいないか探して欲しいと言っている。私たちは迷える子羊から一転して添乗員代行の仕事を仰せつかってしまった。

そんなやり取りをしていたら、もう一組のお客がタクシーでホテルに到着したと電話口で言っている。タクシーの運転手が私たちを置いて、もう一組のお客だけをピックアップしてホテルに行ってしまったらしい。

取り残された私たちは空港で別のタクシーを拾ってホテルに行くことになり、既に暗くなった島内の道をタクシーに乗ってホテルに向かう。

車内で運転手に最近の宮古島のタクシー事情などを聞くが、コロナがあってもなくてもこの島のタクシー事情は変わらないと言う。宮古島ではタクシーはいつでもちょぼちょぼで、空港での出迎えは観光バスかレンタカーがほとんどなので、タクシーを使うのはほんのわずかしかないという。従って空港で待つタクシーはあまり稼ぐ気持ちがない運転手ということで、稼ごうとしたら島内を流しながら電話で迎車待ちをすることだと言っている。この運転手も稼ぐ気持ちがないらしい。

私が期待した会話にならないので話題をかえて天気のことを聞くと、運転手はいきなりじょう舌になった。ちょうど本日が旧暦の10月1日でこの時期を「10月小夏」と呼び、この暖かさが10日間くらい続くのでこの時期に作付けをするという。農業の話になって明らかにテンションが上がっている。どうやら彼は農業の傍ら暇つぶしにタクシーの運転手をしているらしい。

そんな話を聞いていると私たちをピックアップするはずだったジャンボタクシーの運転手も暇つぶし程度に運転手をしているのかもしれない、お客の確認は気にもしていなかったのだろう。この島の人々の生活や雰囲気が何となく理解でき、ジャンボタクシーに取り残されたこともあまり気にならなくなり、怒っても仕方ないと思えるようになってきたから不思議なものだ。

さて、ホテルの入り口では添乗員が待っていた。私たちには申し訳ないと丁寧な対応をしているが怒り心頭の様子が伝わってくる。添乗員は平謝りの言葉を出しつつも「私は今、ジャンボタクシーの運転手で腹の中が煮えくりかえています」と言っている。私は「まあまあ、そう怒らずに、我々にしてみればタクシーを拾って来ただけでその料金も払ってもらったので何も問題ありませんよ」と彼女をなだめた。

彼女は福岡在住で、怒りは博多弁に表れている。その後およそ30分間、私と妻はホテルのロビーで彼女の怒りを鎮めるために愚痴を聞く羽目になった。

■リゾートホテル

私たちが泊まったホテルは宮古島で1、2位の高級ホテル「宮古島東急ホテル&リゾート」で、着いたのが日没後だったが、南国特有の気持ち良い夜風が歓迎してくれた。ロビーや部屋の雰囲気もすこぶる良い。

旅行会社が予約してくれていた夕食は、地元の食材をふんだんにとりいれ高級和食に仕上がっ

ていて十分に満足出来る内容だった。三線を弾きながら沖縄の唄を歌ってくれる女性歌手が各テーブルを回ってくれて雰囲気も抜群だ。この夕食はツアー料金に含まれているので値段は分からないが、内容からしてかなり高いと予想した。出口のところで案内の若い従業員に値段を訊ねると 3800 円というから意外に安いのに驚いた。

翌朝目が覚めてホテルの全容が分かる。ホテルの目の前には海があり、プールや芝生や BBQ ハウスがある。いかにも南国のリゾートホテルという建物と景色が広がっている。その雰囲気はとても日本国内にいるとは思えない。一昨年に行ったフィリピンのセブ島の超高級リゾートホテルによく似ている。写真を撮ってセブ島に来ていると言えば信じてもらえるだろう。しかしこちらの方がセブ島のホテルよりも品格と安心感があって、少なくとも私と妻にとっては遥かに落ち着けるホテルだ。



<部屋から撮ったホテルの前の風景>

■バスガイドは 2 人

全国各地から集まったツアー客と一緒に、迎えに来た大型バスに乗り込む。するとバスガイドが 2 人いる。一人はベテラン、かなりベテランのバスガイドで、もう一人は初々しい若いバスガイドだ。聞けば今年入った新人ガイドが実地研修ということで乗っている。

早速新人ガイドがマイクを持って挨拶をしたが、とちっても、詰まってもその初々しさと可愛さに乗客からは励ましの言葉と拍手が起こる。彼女は熊本出身で、宮古が好きで就職先をこの島に決めたという。この島には若者を引き寄せる何かがあるのだろうか、これから始まる島巡りの旅に期待が膨らむ。

一方、ベテランガイドは巧みな話術と豊富な知識で、宮古島のことを分かり易く話始めた。

■宮古島とは

ベテランのバスガイドが「宮古が初めての人？手をあげて」と乗客に聞くと、ほとんどの人が手をあげた。次に「沖縄本島に行ったことがある人？」、そして「石垣島などの八重山諸島に行ったことがある人？」と聞くと、どちらも多くの手があがった。つまり沖縄といえばまずは沖縄本島、そして八重山、残念ながら宮古はその次だと彼女は言っている。それは私たち夫婦にも当てはまる。しかし彼女は「だから宮古には美しい自然が荒らされずに残っており、島の素朴な生活を感じることができますよ」と付け加えた。

宮古と一言でいうが、一番大きい宮古島を中心に周辺の 6 島で宮古島市になっている。そして宮古島と石垣島のほぼ中間に多良間島、そのすぐ北に水納島（みんなじま）があり、この 8 島を宮古島諸島と呼んでいる。

中心の宮古島の大きさは石垣島とほぼ同サイズだが、標高 525m の沖縄県最高峰がある石垣島とは異なり、宮古島は琉球石灰岩と呼ばれるサンゴ礁が隆起してできた島で、山がない平らな島だ。そのため雨が降っても土に保水作用がなく水がしみ込むので、川もない。

では、水はどうしているのかとガイドに聞くと地下水を貯める地下ダムがあるというから驚きである。この地下ダムが世界最初の大型ダムで、この島の水をまかなっている。

夏は日差しがきつく冬は風がきついというから、私たちは良い時季に来たのかもしれない。

宮古島市の人口は約 5 万 5 千人、観光客は年間 40 万人程が訪れるという。その観光客もここ数年で 3 倍くらいに増えたという。それは主に大型クルーズ船が入港するようになってからだという。近年、宮古島は大リゾートアイランドとして開発が進んでおり、ダイビングやヨットなどのマリンスポーツ以外にゴルフ場が 5 つもある。私も次はゴルフで再訪したくなってきた。

宮古島と周辺 4 島は橋で繋がっているので車で簡単に巡ることができる。今回の旅はその 5 島をバスで巡ることになっている。



<宮古島と周辺の島 上から反時計回りに大神島、池間島、伊良部島、下地島、来間島>

■観光名所は海と橋

宮古島の宣伝ポスターを見ると、綺麗な海に架かる橋の姿が多い。どの橋も中央部分が高くなっているのは船が橋の下を通り抜けるためだという。

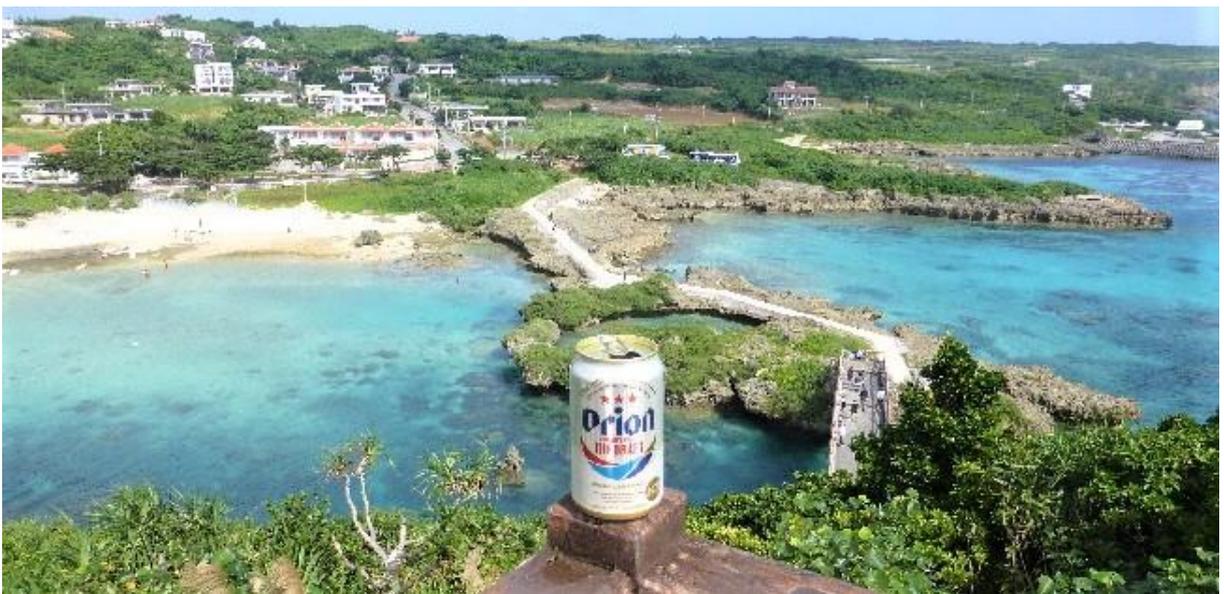
それらの橋を全てバスで渡たり、それぞれの橋の特徴や成り立ちの説明を聞いた。しかし特徴はおろか行った順番さえも私を含めツアー客は覚えていない。分かっているのはおそらくバスガイドだけだろう。それもベテランの方だけで、新人は必死にメモをとっていた。



<来間島の展望台から来間大橋と宮古島を見る>

「イムギヤーマリンガーデン」という景勝地にやってきた。琉球石灰岩でできた小高い展望台に登ると白い砂浜にエメラルドグリーンの鮮やかな海が見える。いかにもサンゴ礁が隆起してできた島だということが良く分かる。

ここで私だけオリオンビールを持ち込んだので記念撮影、そして喉の渇きを潤した。



<イムギヤーマリンガーデンの展望台からの眺め>

「渡口の浜」という綺麗な浜辺にやってきた。遠浅な浜で白い砂がぎっしりと詰まっており、砂は主にサンゴでできているのでこれだけ白いのだろう。浜辺の向こうにはエメラルドグリーン
の海が広がっている。あいにくの曇り空にもかかわらずこれだけ綺麗なのだから、晴れていれば
相当綺麗なのだろう。

浜辺の近くに一軒だけある店では「ヤシガニ飼っています」という看板が出ている。この店では
黒糖の試食をさせてくれるというのでツアー客たちは試食に群がっている。さらに土産物も売
っており、軽食も食べることができ、ダイビング用品のレンタルもしている。この店は何でも屋
になっている。そういえば島の名所にいくつか案内されたが、トイレはあるが売店は少ない。金
儲けに走らずにゆっくりと島の自然を楽しんでいってくださいというメッセージが伝わってくる。

そのメッセージを実践してか、添乗員と新旧バスガイドの3人はアイスクリームを食べて私た
ちの海遊びを眺めている。これもまたのどかな光景だ。

バスガイド、もちろん旧の方から面白い話を聞いた。「この島は潮の香りがしないでしょう」と
言う。確かにあの潮の香り、磯の臭いが無い。その理由は海藻が少ないからだと説明してくれた。
潮の香りの正体は実は植物プランクトンの死骸で、海藻が少ないので植物プランクトンも少ない。

そのため浜辺には海藻が打ち上げられていないから綺麗な海岸なのだと納得した。

「砂山ビーチ」という名所にやってきた。ここも砂がきれいな浜で、ガイドが言うには裸足に
なると気持ち良く、サンゴでできた砂なので夏でも熱く感じないという。夏の海岸の砂の熱さの
原因は鉄分を多く含んだ砂によるものだと説明で、さすが旧ガイドは物知りだ。

私は最初、靴を脱いで裸足になるのを躊躇していたが、ツアー客のほとんどは裸足になって気
持ちよさそうに歩いている。そして新米ガイドも裸足だ。いやストッキングを履いているので裸
足ではないが、ストッキングのまま砂の中を果敢に歩いている姿は何か心を打たれるものがあり、
それを見て思わず私も裸足になった。やはり気持ち良い。そして熱さは感じない。



<砂山ビーチにて 裸足になって撮影>

■珍しい観光名所

「佐和田の浜」という岩がゴロゴロと置かれている浜辺にやって来た。この浜は別名「津波の置きみやげ」と呼ばれている。つまり、かつて大きな津波が襲ってきて、軽い琉球石灰岩の塊を沖に運んだことで出来たという。これは面白いものを見せてもらったと感心する。

下地島の海岸縁に「通り池」という池がある。池は2つあって、海に近い池が直径75m、水深45m、陸側の池が直径55m、水深25mで、2つの池は地下で繋がっており海側の池は洞穴で海と通じているので2つとも海水の池になる。

この池は海岸近くにあった鍾乳洞が波の侵食によって海水が入り込み、天井が部分的に崩落して池のようになった。2つの池の間を観光客が歩くのだが、これはいつ落ちるか分からないから注意して下さいとガイドが言っている。もちろんそんな状態ならば見学は制限されるが、そうならないから老練なガイドが機転を利かせて岩がゴツゴツしていて危ないと言いたかったのだろう。足元の岩の下には2つの池の水が通っているので「通り池」の名前が付いたようだ。

2つの池は深度が違うので色が異なり住む魚も異なることから、絶好のダイビングスポットだとのことだ。



<佐和田の浜>



<通り池の海側の池>

宮古島には宮古空港があるが、下地島にも本格的な下地島空港がある。3000mの滑走路というから私たちが降りた宮古空港よりも長い。実はこの空港は40年前にできた訓練用の空港で長い滑走路を持っているが、数年前のJALの経営不振を発端にして航空各社の撤退が始まり、現在は訓練にはほとんど使われていない。

そのために使用料が格安で、最近では日本各地や香港からLCC（格安航空会社）の直行便が運行している。ちょっと調べるとかなり安く運行しており、この空港は案外お薦めかもしれない。

宮古島の南東端に「東平安名岬」という岬があり先端には灯台があり、ここから面白い現象を見ることができる。

宮古島諸島は東シナ海と太平洋の間に位置しており、地理的には沖縄本島や宮古島諸島、八重山諸島がその2つの海の境目を成している。従ってこの東平安名岬の先にその境目がある。先端の方が太平洋で、手前は東シナ海ということらしい。らしいというのはその境目の線が目で見える訳ではないからだ。ただ太平洋と東シナ海からサンゴ礁に寄せる白波が、左右両方から発生しているという現象を見ることができる。



<東平安名岬からの景色 左が東シナ海、右が太平洋でどちらからも白波が立っている>

「比嘉ロードパーク」という景色は良いが何の変哲もない道が名所になっている。この道は東部の海岸沿いにあり、高さが約 100m の断崖の上を通る県道になっている。宮古島の最高標高が 113m だから島内ではかなり高い場所になっている。

ここからはエメラルドグリーンの海の向こうに、橋の架かっていない大神島を見ることができ、大神島の島民は 20 人ほどで、その平均年齢は 80 才以上という。名前からも分かるように神の島として崇められる神聖な島なので、昔ながらの島らしさが残っておりリピーターに人気があるという。次に来ることがあったら是非寄ってみたい気持ちになった。

■観光客たち

同じツアーのお客は、やはり平日の旅なので現役世代は少ない。それでも珍しいのは男性のみの 4 人組、男女合わせて 6 人組という中高年グループがいる。南の島を楽しむためにこんな組み合わせもあるのだろうと思いつつも、彼らは彼らなりに旅行を楽しんでいる。そうそう、主にこの 2 組が新人バスガイドを励まし応援している。いやちょっかいを出しているという方が正しいかもしれない。

ホテルに泊まっている宿泊客は、小さい子供を連れた家族連れも、若いカップルも比較的多く見かける。直行便を使うと羽田から 2 時間 30 分くらいで来られるリゾート地だからだろう。そういえば“訳ありカップル”も何組かホテルで見かけた。その“訳あり”の見分け方は、私の経験からすると観光地で手を繋いでいるかどうかだ。

■サンゴの海に潜る

半潜水式水中観光船と呼ばれる珍しい船に乗る。上から見ると平べったい四角い船だが、水中を見るための船室が水面下にあり、その名のおり“半潜水式”になっている。船名を「シースカイ博愛」と言うから、“博愛”というのでさぞかし高尚な志を持つ船だと思っていたが、この船は博愛漁港から出ているのでそう名付けられた。

乗ってみると、水面下にある船室からは海中をすぐ近くに眺めることができ、まるでダイビングをしている気分させてくれる。同様な乗り物でグラスボートというものがあるが、グラスボートは上から覗きこむだけなので、こちらの方がはるかに水中散歩を体験できる。

船はサンゴ礁の中を巧みに進み、近くに魚が寄って来る。それも大小様々な魚が集まって来るので、乗船客たちは年甲斐もなく大喜びではしゃいでいる。同様な光景は水族館でも見ることができるが、ここはリアルな海中なので感激の度合いが全く違う。さらに魚に交じって海ガメや珍しい海へビも見ることができた。海へビは猛毒を持っているのでダイビングでは気を付けないといけないが、船の中ではその心配も無用だ。

私は久しぶりに海中体験をすることができたが、これはダイビング経験がない人にとっては相当に良い思い出になることだろう。

聞くと、この船は非常に人気があるので半年先まで予約がいっぱいだという。



<半潜水式水中観光船の海面下の船内>



<窓から見たサンゴと魚>

■最後の盛り上がり

最終日にはバスの中で抽選会が盛大に開催される。

今まで立ち寄った土産物屋で添乗員は結構多くの土産物を買っていたが、それらは添乗員の個人的な土産ではなく、この抽選会の景品のために買っていたものだった。それらは決して高価なものではないが、車内は大いに盛り上がった。

かく言う私も当たって景品をもらった。だからそれを書いているのだが、最近経験することが多いこのような抽選会は添乗員の個人的裁量なのか、あるいは会社の方針でイベントの一つなのか、聞くのを忘れた。

添乗員がお別れの挨拶をして、次に新人バスガイドが挨拶をする。またまた初々しい彼女に大きな拍手と励ましの声がかかる。

その大声援を聞いていた添乗員がボソッと「私も昔は若かったのよ、みんな〇〇ちゃんに持っていかれちゃった」と発していた。確かに添乗員はその気持ちは十分に理解できるが、それを言ってもしょうがない。

それに対して旧のバスガイドの所作が乗客を感動させた。彼女はおもむろに三線を取り出して「私からは皆さま方への御礼を兼ねて歌わせてもらいます」と言って三線を演奏しながら島の唄を歌い始めたから、これには私も乗客も驚いた。2曲ほど歌って盛り上がったところでバスは空港に到着した。この時間配分も絶妙だ。

このベテランのバスガイドの背中を見て新人が育っていくのだろうと感じなら、私たちは宮古空港を後にした。

■旅の記録

実施は2020年11月15日（日）～17日（火）の3日間、その行程を以下に示す。本文中の順番とは異なる部分もある。

- ・1日目 午前自宅出発、13時30分羽田発 JAL 便で那覇空港着、JTA 便に乗り換えて18時10分宮古空港着、19時タクシーで「宮古島東急ホテル&リゾート」に到着
- ・2日目 8時5分ホテル出発、伊良部大橋で伊良部島に渡り牧山展望台、佐和田の浜、下地島に渡り下地飛行場、通り池、伊良部島に戻り渡口の浜、砂山ビーチ、雪塩製塩所、池間大橋を渡り池間島車窓見学し宮古島に戻り、博愛漁港より半潜水水中観光船に乗り、14時10分ホテルに帰着し連泊
- ・3日目 11時ホテル出発、来間大橋を渡り来間大橋展望台、宮古島に戻りイムギャーマリンガーデン、海宝館、東平安名岬、比嘉ロードパーク
17時宮古空港発 JTA 便、那覇乗り換え JAL 便で羽田空港 21時15分到着
自宅着は23時

総費用は2人で約13万円になった。阪急交通社に払い込んだ費用は2人分で126120円、これには56000円のGoToトラベルキャンペーン（以下GOTO）の補助金が適用になっている。さらにGOTOではこの他に24000円の地域クーポンが支給され、用途は土産や食事、飲み物に使われた。以下に内容を記す。

- ・旅行会社払い込み 126120円（GOTO適用済、2人分）
- ・交通費 横浜駅から羽田空港までの交通費 364円×2×往復=1456円（2人分）
- ・昼食、酒代、土産が28926円だったが地域クーポンを充当し端数のみ4926円（2人分）